

桃李記

井上 靖

新潮社版

昭和四十九年九月二十日 印刷
昭和四十九年九月三十日 発行

桃李記

(小説集)

定価一三〇〇円

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七-1
業務部・(03)26615111
編集部・(03)26615411
振替東京八〇八番

印刷所 株式会社三秀舎
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

小説集

桃李記

鬼 の 話	ダ ー ジ リ ン	壺	雪 の 面	桃 李 記	風	道
203	157	139	77	45	27	5

装
画
東
山
魁
夷

道

山に獣道けものみちというものがあると何かの本で読んだことがあるが、なるほどそういうものがあるかも知れない。家の二匹の犬が庭の植込みの中を歩いたり、駆けたりする道はいつも決まっている。そんなことを言い出したのは息子である。息子の書斎は二階にあって、縁側から庭の大部分を見降ろすことができるので、いつとはなく二匹の犬の通る道が一定していることに気付いたのである。私の書斎も庭に面しているが、一階なので事情は少し違う。縁側からも、仕事机の横の窓からも、前庭と、それに続いている裏庭の両方を、いやでも終日眼に収めないわけにはゆかず、塀に沿った植込みの中を駆け抜けて行く二匹の犬の姿はよく見掛けるが、その駆け抜けて行く道が一定しているというような観察はできない。植込みの間を白い生きものが、ある時は分別ありげにゆっくりと、ある時は慌しく移動して行くのを見るだけである。

植込みと言っても、塀に沿って三かわ並べぐらいに雑木を配しただけの繁みであるが、家を構えてから十五年ほどになるので、雑木の何本かは、道路を隔てて建てられてある或る公共団体の二階建ての職員宿舎の目匿しになる程度には育っている。塀際さわらには槇、檜などの常緑木が

並んでいて、そのこちら側には雑然と花木が植わっている。山桜、梅、杏、李、ライラックといった木が、それぞれに時季が来ると花をつける。何本か櫟も混じっていて、この方はやたらに大きく育っている。そしてそのもう一つこちら側には、躑躅とか、木瓜^{ぼけ}とか、沈丁花とかいった類の丈低い灌木が配されている。

もともと広い敷地ではないが、長方形のいやにひよろ長い地面で、鰻の寝床に家を建てたようなところがある、それを塀で囲んである。従って塀の一方はいやに長く、一方はいやに短いということになる。甚だ感心しない形の屋敷ではあるが、ただ一つ取得と言えば、犬を放し飼いしておくにいいことである。前庭から裏庭へと塀に沿って駆け抜けて行き、庭の隅の櫟の木をひと回りして帰ってくると、——勿論時間になるとあつという間のことではあるが、日に何回も繰り返していると、二匹とも、まあ運動不足になることはないだろう。

息子から犬の道の話聞いてから、私は犬が塀際の植込みの中を歩いて行くのを眼にすると、それとなくその歩いて行く道筋に注意するようになった。縁側の藤椅子に腰かけている時のこともあるし、庭の芝生に降り立っている時のこともある。とにかく塀際の植込みの中を犬が移動して行くのを見ると、そこへ近寄って行ってみたり、反対に遠くに行つて灌木の茂みを透かしてみたりする。何回もそんなことを繰返しているうちに、なるほど息子の言う通りだと思った。確かに犬には犬の道があるようであった。木蓮の木にぶつかると、紀州犬も柴犬も右に

は回らないで左に回った。右に回った方が空地が広くてらくそうに思えるのであるが、犬たちはそうしなかった。わざわざ左に回って躑躅の株との間の体一つが漸く通れるような狭いところを通路にしている。そういうところは他にまだ何カ所があった。灌木の茂みの中に小鳥のための水飲み場が作ってあったが、どういうものか、そこは避けて塀際へと迂回して、窮屈な場所へと身を運んで行く。と言って、窮屈な場所ばかりを好んで通っているわけではなかった。大体においては駆け抜けて行き易い恰好な場所を選んでるのであるが、そうした場所を繋ぎ合せている通路の中に何カ所か、人間の眼から見ると、理解に苦しむような場所が選ばれているのである。ゆっくり足を運んで行く分にはそれでもいいが、庭の隅などに訝かしげな音が始まったのを聞き咎めて、急遽馳せ参じなければならぬといった一旦緩急の時でも、紀州犬も柴犬も、疾風の如くそこを駆け抜けて行くのである。

山に獣道があるという言い方を真似れば、わが家の庭にも犬道があるのである。と言って、二匹の犬は全く同じ通路を選んでいくわけではなかった。これは私自身の観察によることであったが、紀州犬が通るのに柴犬が通らないところと、柴犬が通るのに紀州犬が避けているところがあった。庭の隅に煉瓦で造った物置小屋があるが、紀州犬はその背後を迂回して通り、柴犬の方はそこを敬遠して樺の木のもとに道を作っている。それからもう一カ所、大きな躑躅の株が何本か身を寄せ合っている一画を、柴犬は右回りし、紀州犬は左回りする。

こうしたことを食卓の話題にのせると、犬の面倒を一番よくみてやっている娘は、それは食物を匿している場所の關係からではないだろうかと言った。それぞれが自分の食物の隠匿場所を持っていて、お互いが相手の隠匿場所には近寄らない協定でもできているのではないかと言うのである。犬たちは時々与えられた食物を食べないで、どこかへ持ち去ってしまうことがあるが、暫くして帰って来ると、いつも鼻の頭を土で黒くしている。土の中に埋めてしまうのである。お互いがお互いの地中の隠匿場所を相手に知られないようにし、またお互いに相手のその場所に近寄らないでおうといった協定が本能的に成立しているのかも知れない。そう言えば紀州犬は物置小屋の背後側からふいにひょっこりと姿を見せることがあるし、柴犬の方は樺の木の右手の茂みから、これまた時ならぬ時に立ち現われて来ることがある。食物の隠匿場所であるかどうかは別にして、そこがそれぞれの、決して他を入れない休憩場所であると見れば見られないことはない。

柴犬も紀州犬も共に雌で、毛なみは白い。柴犬は生れたばかりのを家に連れて来てから十二年になる。老犬である。紀州犬の方はまだ満三年で、目下のところ若々しいエネルギーに満ち溢れている。喧嘩すると、柴は紀州の敵ではなく、ひとたまりもなくやられてしまうが、しかし、平時は柴の方が権力を持っていて、紀州の方は何かにつけて遠慮している恰好である。あとから家に引き取られて来た肩身の狭さがあるのであろう。

柴犬は家の者には誰彼の区別がなく愛想がいいが、紀州犬の方は飼われて三年になるというのに、いまだに誰にも懐かない。誰かが食物を盛った器を持って庭に現われると、柴犬の方はすぐ寄って来るが、紀州犬はいったん茂みの中に身を匿し、灌木の間から家の方を窺い、人の中から引き揚げて暫くしてからでないと、絶対に姿を現わさない。野性を失っていない証拠で、人間というものを信用していないのである。猜疑心と警戒心で全身を固めているこういう場合の紀州はなかなかいい。樹間に一匹の野性の生きものが居る感じである。白い毛色が少し青味を帯びて見え、身の構えは精悍である。そして家から誰ももう再び庭に現われないということを見定めた上で、紀州は塀際の茂みから芝生の上へ姿を現わして来る。いささかの隙もない感じである。そして食物の方に近付いて行くと、持ち運びのできないものはそこで食べるが、肉片などの場合は口に咥えてどこかへ持ち去って行く。

私がそうした紀州犬について話すと、息子は紀州のそういう面の面白さでは深夜のそれが最たるものであると言う。深夜、紀州は昼間どこかへ埋めておいた食物を咥えて、茂みの中の通路を伝って居間の前の芝生へとやって来る。どこで食べてもよさそうに思われるが、どうも毎日食器の置かれる芝生の一面を正式の物を食べる場所と思い込んでいるようなところがある。食物を口に咥えて芝生に姿を現わした紀州犬は、昼間とは打って変った落ち着いた態度で、食物をそこに投げ出し、少しもがつつしたところは見せないで、悠々とあたりを眺めやったりし

た上で、さてそれではといった風に口を持参の食物の方に持つて行く。月でも出ていようものなら、いかにも月でも観賞しながら食事をとっているといった恰好であると言う。

この話を聞いている時、私には自分の知っている二匹の犬の専用通路が全く異ったものとして眼に浮かんできた。食物を口に咥えた一匹の生きものを一点に配し、全体を夜の闇で包んでみると、それはもはやわが家の庭の貧しい犬道ではなかった。大袈裟な言い方をすれば、山野を貫き走っている長い獣道に他ならないのである。そしてそこを伝って、漸くにして芝生の一画に立ち現われる紀州犬の姿には、野越え山越え千里の道を遠しとせずやって来たといった孤独精悍なものがあるのではないかという気がする。実際に見ていないので何とも言えないが、わが家の犬道も、そこを伝い歩く犬も、夜になると昼間とは全く異った生き生きした表情を持つてくるのではないかと思われた。

2

先年嫁いで二児の母親になっている上の娘が家に来た時、私は二匹の犬の専用通路のことを話題に取り上げた。そして娘を庭の隅の杏の木の間根もところまで同行させ、塀に沿った雑木の茂みの中を犬道がどのように走っているかを説明した。娘は生れ付きこうしたことには関心を持たない性格で、半ば迷惑そうに庭の隅までついて来ていたが、ほんとに犬の道があるわ

ね、でもここはこう通るんでしょ、ほら、ここが道になっていますと、身を屈めて地面を覗きこみながら、私の説明を多少訂正するような発言をした。娘が指し示すところを見ると、山桜の白い花弁が一面に散り敷いている地面に、なるほど犬の足跡と覚しきものがたくさん捺されてあるのが見られた。帯状をなしているその部分だけ、白い花弁は泥にまみれて無慚な感じになっており、確かにそこが犬の通路になっていることを示している。私が犬の通路であると考えていたところは檜の切株の向うを回っており、白い花弁の散り敷いている場所からは外れていた。しかし、眼の前に証拠を突き付けられた恰好で、私は娘の言うことに従わないわけには行かなかった。すると娘は何もこんなことに大騒ぎする父親の気持が判らないとでもいうように、友子だって、ちゃんと自分の道というものを持っていますよと言った。友子というのは娘の子供で、私にとっては孫娘に当る六歳の少女である。この間までは幼稚園に通っていたが、この春から小学校に通い始めている。

娘は言う。幼稚園の送り迎えをしていると、子供たちには子供たちの道があるということが判る。子供たちはいつもそこを通りたがる。どうしてこんなところを知っているのかと思うような裏通りの道で、時にはひとの屋敷ではないかと思うようなところをも小さい靴で踏んで行く。送り迎えは母親たちが交替でやるので誰かがそんな道を連れて通ったことがあるのであるが、とにかく子供たちはそこを通りたがる。別段面白い道でも楽しい道でもなさそうだが、

子供たちの足はその方へ惹かれて行く。どうせ遊びなんだからと思って、自分が当番の時はいつもそこを通ってやるが、ああいうのは子供の道とでも言うのではないであろうか。

娘一家は二年ほど前に神奈川県田舎に建てられた会社の社宅にはいっており、同じ会社の従業員の家族が何十組か三棟のアパートに配されている。もはや東京の子供たちには登校する道の選択などということは考えられないが、田舎に住んでいるお蔭で、孫娘の幼稚園の行き帰りにはまだそのような余裕が残されているのである。

娘に言われて、確かに子供には子供道があると、私は思った。犬道に氣をとられて、子供道に思いを致さなかったのは、われながら不覚に思われた。私は書齋に引き返すと、縁側の籐椅子にもたれて、柴と紀州の二匹の犬が春の陽光を浴びて寝そべっているのを眺めながら、犬道ならぬ子供道のことを考えた。私は伊豆半島の中央部の天城山麓の山村に育っているが、子供の時のことを振り返ってみると、村中を何本かの子供道が走っていたことに気がかざるを得ない。溪谷の共同風呂に行くにも、隣村の親戚に使いに行くにも、子供たちは自分たちだけの道を持っていた。毎朝の登校路など今考えてみると奇妙なものである。田圃の畔道を通り、小さい崖を降り、何軒かの農家の背戸を縫った上で、小学校の前を走っている往還に出る。そんなことをしないでしょっとまともな道があった筈であるが、子供たちは何とはなしに旧道でも新道でもない自分たちの専用道路を作っていた。歩きにくい上に遠回りになる、道とは言えない

ような道を選んで、専らそこだけを使っていた。

鮮やかな印象でそうした子供道の一つが思い出される。夏休みになると、子供たちは毎日のように溪川の水浴場へ行くのが日課であったが、いつも崖の斜面の細い道を伝って溪間の小さい淵へと急ぐ。大人などのめったに通らぬ子供たちだけの道であった。溪に落ち込んでいる側の斜面には血のように赤い鬼百合の花が咲き、山側の斜面ではそこを埋めている木立から雨のように蟬の声が降っている。午下がりの陽光に上から照り付けられながら、半裸の子供たちは一列になって、その道を駆けている。蜻蛉の群れが次々に顔にぶつかる。青い水を湛えたインキ壺のような淵に一刻も早く身を投じたいだけの思いで、子供たちは今にも点火して燃えあがりそうな体を必死に川瀬の音の聞えている溪間へと運んで行く。今思うと、そこにはこれこそ夏であると言えるような夏があったのである。その後再び訪れて来たことのない強烈な夏が、確かにその幼時の子供道にはあったと思う。

夏の思い出ばかりでなく、幼少時代に一度やって来て、その後再び訪れることのない周囲の自然との取引きの鮮烈な印象は、その多くが子供たちが自ら選んで支配下に置いた子供道の思い出につながっている。その後再び、そこにあったような夕映えの美しさも、薄暮の淋しさも、夜の怖ろしさも経験することはない。風の音までが子供道においては凜々と鳴っていたのである。夕方、娘が自家へ帰るといって書斎に顔出しにやって来た。そして昼間杏の木のとこで口